



# 韓国光州・新昌洞遺跡発掘調査参加記

東アジア考古学研究室  
古澤 義久



新昌洞遺跡 遺跡全景

2011年度から長崎県埋蔵文化財センターと韓国・国立光州博物館との間で相互に遺跡の発掘調査に職員を派遣するなど共同研究を進めています。その一環として2011年8月29日～9月9日の約2週間にかけて、国立光州博物館が進めている光州市にある新昌洞遺跡の発掘調査に参加しましたので、その時の様子をお伝えしたいと思います。

遺跡のある光州という町は韓国南西部にある人口約147万人の大都市で、広域市(道に属さない地方行政地区)に指定されており、湖南地域(光州・全羅道)の中心地です。市内東部には標高1187mの無等山がそびえ、そのふもとに雄大な栄山江が流れています。

新昌洞遺跡は韓国で初めて調査された低湿地遺跡として非常に有名な遺跡で、国家指定史跡第375号に指定されています。低湿地遺跡は水気の多い土が遺物をパックしていますので、遺物の残りがよく多彩な木製品が出土しています。また、丘陵部分では環濠が発見されています。遺跡の時期は韓国でいう初期鉄器時代から原三国時代が中心で、ちょうど吾岐の弥生時代の環濠集落である原の辻遺跡と同じような時代の遺跡です。



新昌洞遺跡出土 粘土帯土器

2011年度の発掘調査は栄山江の支流である極楽江左岸の丘陵部を中心に進められました。表土からは高麗時代や朝鮮時代の陶磁器が出土しました。現在でも調査地は民墓(土饅頭を盛った庶民の墓)がたくさんありますので、出土した陶磁器もこれらの民墓と関係の深いものでしょう。高麗時代以降に畑や墓地に利用されたために初期鉄器時代の層は厚くはありませんでしたが、本当にたくさんの粘土帯土器や把手がつく壺、高杯などの初期鉄器時代の土器が出土するのを目の当たりにして新昌洞遺跡がいかに規模の大きな集落であったかということを実感しました。出土した粘土帯土器とは土器の口の部分に粘土の帯を貼り付けた特徴的な土器で、原の辻遺跡などでも出土します。弥生時代に原の辻遺跡を訪れた人々の原郷をみた思いがして感慨深いものがありました。遺構としては、初期鉄器時代の竪穴建物跡などが確認されました。残念ながら、遺構を確認したところで帰国しなければなりませんでした。その後全面発掘に進み、遺構の内部調査も行われたそうです。

2週間という短い期間でしたが、発掘調査を担当された李政根学芸研究士、金東完学芸研究士をはじめとする韓国・国立光州博物館の方々には大変お世話になりました。末筆ながら感謝申し上げたいと思います。

## オープン収蔵展示

長崎県埋蔵文化財センターでは、「出土品収蔵庫」の一部の壁をガラス張り(高さ約5m)とし、収蔵庫を来館者に見せる展示空間にしています(オープン収蔵庫)。現在は「人の一生」(平成23年12月～平成24年5月)をテーマに、県内遺跡の発掘調査によって出土した遺物を展示しています。



オープン収蔵展示「人の一生」風景



オープン収蔵展示「人の一生」バナー

発行/長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター  
〒811-5322 長崎県杵岐市芦辺町深江鶴亀515-1  
TEL: 0920-45-4080 FAX: 0920-45-4082

なん ぼく し てき  
南 水 市 糶

URL: <http://www.nagasaki-malbun.jp/>

第2号  
平成24年3月

## “カラカミ遺跡”がアツい!

～一支国弥生集落遺跡「カラカミ遺跡」の発掘成果～

吾岐市教育委員会文化財課  
松見 裕二

平成23年度に実施了一支国弥生集落遺跡実態解明調査[カラカミ遺跡]成果について紹介します。カラカミ遺跡是一支国の王都・原の辻より北西に約5キロメートルの場所に位置します。標高70メートル前後の丘陵頂部を中心に集落が形成されており、標高10メートル前後の平野部に形成された原の辻遺跡や車出遺跡群とは立地的環境が大きく異なります。調査区を設定した場所は、1977(昭和52)年に九州大学考古学研究室が試掘調査を実施し、白川貝塚として周知されていた場所です。

調査では、約40年前に発掘した試掘坑を確認し、当時検出していた遺構の広がりを確認するため調査区を拡張しました。すると、調査区内から1本の大溝が検出されました。大溝の幅は検出段階で最大幅3メートル、深さ約1.5メートル、断面形状がV字形になっていることが判明しました。

大溝からは、大量の土器とともに石製品や骨角器、青銅器や鉄器といった当時使用されていたものがたくさん発見されました。これらの遺物は、当時の集落の実態を解明する上で欠かすことのできない貴重な資料であり、集落が形成された時期や集落の特徴について知ることができます。



カラカミ遺跡 大溝から発見された遺物

今回、大溝内からは土器や石器などいっしょに“当時の食生活”や“一支国の自然環境”などを解明することができる自然遺物がたくさん見つかりました。自然遺物にはシカ、イノシシ、イヌといった動物の骨やアワビ、サザエ、ハマグリ、カキといった貝類などがありました。動物類ではイノシシの骨が多く、貝類ではサザエとカキが大量に見つかりました。これらの自然遺物から、カラカミ遺跡を構成する集団が“半農半漁”の生活をしてきたこと、特定の動物や貝類を好んで捕獲していたことなど当時の集落構成の実態や食生活事情について新たな情報を得ることができました。

弥生時代後期中頃[今から約1850年前]に土器や石器などを大溝内に集中して廃棄したことが遺物の出土状況から見えてきます。また、一度に大量廃棄された貝をはじめ、意図的に穿孔された土器や口縁部を打ち欠いた土器、小型仿製鏡やト骨の出土からみて、日常生活で使用していたものを廃棄したというよりは祭祀や儀式を執り行ったあとにまとめて廃棄した様相が窺えます。

今回の大溝の発見はこれからのカラカミ遺跡の調査において新たな発見を予感させる第1歩となりました。今後の調査成果に乞うご期待!



カラカミ遺跡 大溝土層剥ぎ取り作業



カラカミ遺跡 小型仿製鏡(直径4.3cm)



# 長崎県埋蔵文化財センター 遺跡発掘調査情報

〔遺跡名〕	〔調査種別〕	〔調査期間〕	〔調査面積〕
①久留里遺跡	範囲確認	平成23年5月13日～平成23年6月3日	60㎡
	本調査	平成23年10月3日～平成23年11月30日	310㎡
②葛瀬遺跡	範囲確認・試掘	平成23年10月17日～平成23年11月2日	80㎡
③尾和谷城跡	本調査	平成23年4月18日～平成23年6月30日	1594㎡
④竹松遺跡	範囲確認・試掘	平成23年7月4日～平成23年9月8日	257㎡
	本調査	平成23年11月7日～平成23年3月2日	1500㎡
⑤原の辻遺跡	範囲確認	平成23年5月26日～平成23年12月26日	850㎡

## くるとり 久留里遺跡(時津町)

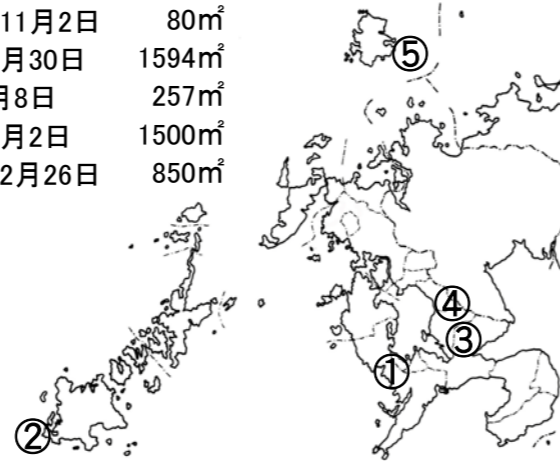
縄文時代の遺物・遺構を確認しました。土器は阿高式系土器など多種が出土し、石器は、石鏃・石匙・磨製石斧・石錘が出土しています。なかでも石錘の出土が多く、網漁に使用されたと考えられます。貯蔵穴は深さが約30～40cmで、その直上に集石で蓋をした形で検出されました。遺構周辺は湧水が激しく、この湧水を利用してアク抜きがされた可能性もあります。弥生時代以降の遺物は少量で、他の場所へ生活場所が移っていったと考えられます。



久留里遺跡 石錘



久留里遺跡 貯蔵穴上の集石



葛瀬遺跡 調査風景

## かづらせ 葛瀬遺跡(五島市)

農業基盤整備(圃場整備)が計画されていたため、五島市教育委員会の要請で発掘調査を行いました。山の斜面に段々状につくられた水田に調査区(2m×2m四方)を計20か所設けて1～2mほど掘り下げましたが、良好な遺跡は残っていませんでした。明治時代の初頭に作成された字限図(地籍図)に「田」とあるので、その頃までには山の斜面を開拓し水田にしていたのでしょう。遺跡は、その工事の際に壊されたものと考えられます。水田の造成土から縄文土器や弥生土器、中世の中国産白磁など若干の遺物が出土しました。

## おわたに 尾和谷城跡(諫早市)

諫早市と大村市の市境にある舌状に伸びた小高い丘で、遺跡範囲が南北約1.500m、東西約600mと推定されます。戦国時代に諫早を支配した西郷氏の支城であったと言われていません。戦国時代頃の焼土坑、土坑を発見し、輸入陶磁器である青磁の他に、土師器、瓦質土器、石鍋などの遺物が出土しています。この山自体が大きな城跡と言えるでしょう。



尾和谷城跡 調査区遠景



尾和谷城跡 調査風景

## たけまつ 竹松遺跡(大村市)



竹松遺跡 井戸跡(?)

竹松遺跡の調査では古墳時代から古代にかけての溝跡や、縄文時代から中世までのさまざまな遺物が出土しています。古墳時代のものと思われる耳飾りやガラス玉も出土しました。それらが、石棺に用いられる板石の周辺で見つかったことから、その副葬品と考えられます。また、古代の中国産の青磁や緑釉陶器と呼ばれる土器片も出土しました。当時としては大変珍しい土器で、これらを手に入れるような財産や地位のある人が古代の竹松にいたのかもしれない。

## はるのつじ 原の辻遺跡(壱岐市)

今年度の発掘地区は弥生時代中期の船着き場跡が確認された地点のすぐ北側にあたり、船着き場跡周辺の重要遺構の発見が期待されていました。発掘調査の結果、船着き場跡に流れ込む河川跡が発見されました。この河川跡の中に中洲状の陸地があったことも判明し、中洲状の陸地上に河川に沿って石列遺構も発見されました。この石列は30～50cm大の石を列状に並べたもので、船着き場跡とほぼ同時期の弥生時代中期のもので、船着き場跡に流れ込む河川に対する水利施設であった可能性があります。このほか古代末～中世の礫群も発見されました。ここでは土師器のほか多量の自然木やシカ下顎骨などの獣骨が発見されました。



原の辻遺跡 石列遺構



原の辻遺跡 シカ下顎骨